

特別講演
＋
対談

今福龍太

野谷文昭

(司会・聞き手)

混合体としての
アメリカスへ

野谷 これから今福龍太先生の講演会を始めたいと思います。先生は現在、東京外国語大学大学院の教授をされています。ご専門は文化人類学ですが、紹介に困るくらい色々な教養を持った方です。お生まれになったのも今お住まいの辻堂ですか？ あ、東京でしたか。辻堂は茅ヶ崎の隣です。僕は逆に茅ヶ崎で生まれて、多摩川を挟んで東京の対岸にある川崎市に移りました。いささか牽強附会になります。が、こうした移動や越境というのは彼の特徴なんです。そして異質な要素を混合し、何か一つ絶対的なものに収斂させないと

いうのもそうです。けれど、これが日本人にはなかなか難しく、どうしても収斂させてしまう。ところが、彼はその困難を軽やかに越えてしまう。さらにもう一つ大きな特徴が詩的な文体です。リズムや美しい暗喩を駆使しながら、様々な知や経験を語ると言うよりむしろうたっている。この独特な文体も高く評価されています。ですから一度読むと、病みつきになるだろうという気がします。

『ハーフ・ブリード』誕生まで

今福 ご紹介ありがとうございます。野谷先生とは、生まれ育ったところもほんの数キロしか離れていないということを知りましたので、同じ湘南ボーイとして後ほどまた親しくお話ししたいと思います(笑)。

ちょうど昨日、私の最新著である『ハーフ・ブリード』(河出書房新社)が刊行されました。今日ぐらいには全国の書店に並んでいるだろうと思いますが、ここで初めてお披露目する感じになります。

この『ハーフ・ブリード』は僕自身にとって非常に思い入れの深い本になりました。というのも、自分自身が今のような形でものを考え、書くようになった、その端緒となったのが、二六歳の時に日本を半分捨てるぐらいの覚悟で飛び出して行ったメキシコ行きだからです。そこから世界を新しい形で見ていくための一つのヴィジョン、この本のタイトルにもなった「ハーフ・ブリード」、混血・雑種・混合体という意味ですけど、文明国、先進国では消えてしまった、あるいは支配的な文化が抑圧してしまっているヴィジョンを発見し、探求してきた

軌跡が、この三十五年になるわけです。その全体を総括するつもりで、二年ほどのあいだ雑誌『すばる』に連載してきたものが、今回書物としてまとまりました。ですから、自分にとってこれは、ようやく書くことができた決定的な、総括的な、半ば自伝的な本ではないかと思っています。

マリーゴールドの花とメキシコ

今日は野谷先生が繊細に配慮してください、今日の話にも関連する花を用意してくださいました。ここに飾られているのはマリーゴールドという花です。メキシコの国花はダリアですけど、マリーゴールドはそれより少し小振りの花です。マリーゴールドも先住民の時代からメキシコに自生していた花ですが、メキシコではインディオの信仰において死者の花ということになっていて、十一月初頭の「死者の日」、つまり死者追悼の祭りの日には、お墓や祭壇がオレンジと黄色のマリーゴールドの花で飾られる、そういう特別な花です。また単なる追悼の花というだけではない、もっと深い、精神的な意味も持った花なので、傍らにマリーゴールドを置いてお話しするということも、メキシコから始まる今日の話にはふさわしいように思います。

メキシコという国は最近地震などが続いて、今年の九月七日と十九日でしたか、最初は南のチアパス州で大きな地震がありました。それから二週間ほどして、今度はプエブラ州というところでやはり大きな地震があって、かなりの方が亡くなっています。大地震が立て続けに起こり、日本のニュースでもメキシコという国の名前を耳にする機会が増えています。

それから、ミラノにいたサッカー選手の本田圭佑が最近パチューカというメキシコのイダルゴ州の、メキシコのサッカークラブの中では最古のクラブの一つに電撃的に移籍したりして、またメキシコがちよっと注目されています。

しかし何よりも、昨年からドナルド・トランプという人が、急にメキシコとアメリカの国境線に壁を建設して、一切のメキシコからの不法入国者をシャットアウトする、そして、その費用はメキシコに全部払わせると、大統領選のキャンペーンの時から言い始めて、突然「メキシコとアメリカの関係は、こんなことになっているのか」と知った人も多いかもしれません。

そのトランプが大統領になってしまつて、国境の壁の問題は現実の問題になってきました。カナダ・メキシコ・アメリカの三方国で結んだNAFTA（北米自由貿易協定）についてもトランプは「破棄する」と言つて、これまでのメキシコとアメリカの関係を大きく改変し、揺るがし、あるいは場合によっては破壊する、そういう言動を平気で行う人が今、様々な形で話題になってしまつています。彼は大統領選のキャンペーンで、「メキシコ人はみんな麻薬密売のマフィアのメンバーだ」とか、「メキシコ人はみんなレイピストだ」とか、人種差別的な発言を繰り返してきた人です。こういう発言の中にある二つの国の深い関係性についても後で話したいと思います。

メキシコ人とは誰のことか？

我々の周りにそういうメキシコがありますが、今日は必ずしも国としてのメキシコの話をしように思っているわけではありません。そもそもメキシコ人という言い方をしても、そのメキ

シコ人はメキシコに住んでいる人だけを指しているわけではないという非常に基本的な社会的・文化的現実があります。形式的にはメキシコという国に住んでいる人間がメキシコ人になるのでしょうか、現実には歴史的な様々ないきさつの中でメキシコ人たちは、メキシコとアメリカ合衆国という二つの国にまたがって広く暮らしてきました。

そもそも歴史的には、インディオの土地にスペイン人が入植してきて、征服し、植民地化し、それから独立してメキシコという国が出来たわけですが、その頃のメキシコという国は、カリフォルニアとかネバダ、アリゾナ、ニューメキシコといった今のアメリカ合衆国の南西部一帯を含んだ国だったわけですが、そこにはスペインからの移住者の末裔たちや、あるいはメキシコの中で先住民と混血化したメステイソーと呼ばれる住民たちが、アメリカの南西部の地帯に広く住んでいました。ところが、十九世紀中頃にメキシコとアメリカが戦争をしました。実際には、アメリカが一方的にメキシコに侵略したのですが、それで勝利したアメリカが国境線を南に下ろし、メキシコの土地を自らの領土に組み込んだという歴史的事件が百五十年ほど前に起こったのです。

その段階でメキシコ人たちは二つの国家に離れて住むようになりしました。彼らの居住地域の真ん中に一方的に新たなボーダーが引かれたわけなので、「国境をメキシコ人が不法に越境するから困る」というアメリカの言い分が一方的なものだということとはすぐ分かると思います。元々親戚や家族が両方の領土に住んでいたところに、いきなり国境線が引かれてしまったわけです。家族や親戚が二つの国に分かれて住むようになった状況の中で、人間が移動するのは必ずしも経済的な理由、豊かな国に貧しい国から人が労働を求めて流れ込んでいるというだけ

ではない、もっと深い、精神的、文化的な理由があるわけです。

言語にしても、メキシコ人は新大陸において、スペイン本国のスペイン語とは違う「メヒカニスモ」とも呼ばれる独特のスペイン語をあみだしました。さらに北部では、スペイン語を使っていた人たちがアメリカの領土に組み込まれることによって英語という支配言語にさらされ、その中で英語でもない、スペイン語でもない、中間的な言語を作り上げながら生きているという苦渋の状況を余儀なくされました。ですから、メキシコ人といっても一つの言語で語ることができない複雑性を持っている、同時に百を超える先住民言語の歴史が今も残っていますから、メキシコ人というのは百数十の言語を話す一つの大きな多言語共同体だというふうに言うこともできます。これはメキシコという国だけを見ているのでは見えてこない視点です。結果的に人種・民族的な作られ方も非常に複雑になり、先住民のインディオ、スペイン白人、植民地下で混血化したメステイソー、さらに北米で起こった様々な民族混淆によって、メキシコ人と呼ばれる人には多様な人種の起源が流れ込んでいます。

チカーノのことは

二つの国家、二つの言語、先住民の言葉を入れると三つの言語、と人はいく数えてしまいます。けれども私は、言語あるいは民族や人種は、数で数えることは不可能ではないかと思っています。バイリンガル、トライリンガルと言って、言語の場合、言葉を二つ話す、言葉を三つ話す、それが一つのステータスや目標になっているかもしれません。しかし、それはあくまで一つの言語が完結した実体を持っているという想定のもとで、二

つ、三つ、と数えているわけです。ところがこうした発想は、現実には生きられている言語態とはかけ離れたものなのです。

今日はメキシコ人や、とりわけアメリカに住んでいるチカーノの話をしたいと思いますが、チカーノとは広義にとらえればメキシコ系アメリカ人とはば重なると考えてください。このチカーノたちの日常言語は、先ほどお話ししたように、英語とスペイン語の間を行き来するような混雑言語です。スペイン語の表現の中に英語の単語やフレーズが飛び込んだり、英語の表現の中にスペイン語の単語やフレーズが飛び込んだり。そういう言語学的には構文・文法構造を逸脱した言語行為が日常的に行われています。しかしそれは決して意図的に混ぜてしゃべっているのではなく、そうした言語態こそが彼らの生きていく歴史の中で作られてきた、彼らにとつての唯一のことばのありようなのです。ですので、これは英語・スペイン語のバイリンガルなどではまったくなく、相互を即興的に越境・侵犯・継ぎ合わせ続ける、トランスリンガルあるいはインタリリンガルといった表現の方がよりふさわしい言語行為なのです。チカーノたちのことばを一つ、二つと数えることが不可能だということとは、これでお分かりになると思います。

チカーノたちは自分たちの歴史と現在の総体を表現できることばを（すべて合わせて）一つ持っている。それはしかし、形のうえでは英語とスペイン語の非常に複雑な複合体として出ています。そういうことが現実にはチカーノだけではなくて、世界中の様々な場所において存在するのです。以前から私が「クレオール」という概念によって探究してきたような言語・文化複合体です。そのような土地では、言語とは一つ一つの固有言語を一つ、二つ、三つと数えていくような形では現実には生きていないのです。固有言語を数で数えるような発想は、

あくまで形式的な、机上の、「モノリンガリズム」（単一言語主義）的な考え方にすぎません。現実には生のリアリティの中でことばが生きている生きられ方というのは、もつとずっと複雑ですし、しかも現実には、いくつもの言語の層が一人の人間の中に堆積し、人間の言語的な歴史を形作って存在しています。

日本語だけを使って生きているかのように思っている我々ですら、実は様々な言語を自分の中に取り込んでいます。いま私たちが使う日本語の古層には、アイヌ語やツングース語など北方の民族語に由来するものや、朝鮮半島に源流を持つもの、漢語系のもの、さらには南方島嶼地域に由来するものなどが複雑多様に流れ込んできています。歴史的な出来事を媒介にして外から入ってきた言葉もさまざまに組み込まれており、とりわけ近代以後では十六世紀、十七世紀からオランダ語やポルトガル語の単語がたくさん入ってきていたことはご存じだと思います。それ以後も明治以降になると英語の様々な単語が入ってきています。もちろん教育によって一応の共通語として身につけている日本語のもっと奥深いところには、それぞれの人々の土地言葉（方言）というものがあります。これは規範的言語・公教育言語・国家語として成型された標準語（国語）とは別の、自分のヴァナキュラーな（生得の）言語の層を形作る言葉です。長いスパンで考えれば、日本語もまたこうしたハイブリッドな言語であり、「一つ」の固有言語と数えることが難しいほど複雑な構成体なのです。メキシコ人、とりわけチカーノにおいては、こうした言語接触と変容のプロセスが非常に短い時間に激烈なカタチで生じた、と考えればよいと思います。

ハーフ・ブリードとは

ハーフ・ブリードは英語で 'half breed'、これは混血とか雑種とかいう意味ですけども、侮蔑的な意味を持った言葉としてはじめアメリカで生まれました。インディアンと植民者である白人たちの混血児を「ハーフ・ブリード」と呼んで蔑んだことから始まった言葉であり、日本語では「合いの子」に相当する言葉です。

「合いの子」は日本で現在、公の場で使うと「差別語だ」と言われてしまう言葉ですが、言語の歴史を大事にしようと思えば、現在の人道的な視点からそれが差別語的なニュアンスを含んでいたとしても、それ自体を一律に言い換えてすませることはできません。言語がどのような歴史をたどって今に至っているかということをしちんと我々が把握するためにも、たとえば日本語で言えば「合いの子」英語で言えば「ハーフ・ブリード」という言葉がどういう差別的な言葉の歴史をたどってきたのかをきちんと把握しておかなければいけない。そのためにも、あえてそういう言葉呼び出しながら、正確にその文脈、歴史、背景を考え続けていかなければいけないという使命を、とりわけ学問は担っているのです。

初めてのメキシコ体験

さて僕が初めてメキシコに行った一九八二年。一ドルが二六〇円を超えていた記憶がありますので、まだまだ円は世界的に弱い通貨でした。そういう状況の中でメキシコに行って何年も

暮らすというのは生活上の苦勞もありました。それからこの時代はまだコンピュータやインターネットといった電脳的な道具が全く存在しない時代でした。人間と人間のコミュニケーションにおいて、そうした電子的な空間が全く存在していなかったというところが、メキシコのような国で暮らすことのより強い身体性を実感させてくれたと思います。アップル社がマッキントッシュというコンピュータを初めてつくったのが一九八四年ですからちょうど私のメキシコ行きの二年後です。

国際政治においては、中東のレバノンで内戦が終わり、アメリカがベイルートに進駐していた時期です。翌年の一九八三年にアメリカは社会主義化した中米の小国ニカラグアを空爆し、カリブ海のグレナダという島国に軍事侵攻しました。中南米で芽をふいていた社会

主義や共産主義の小さな芽を、アメリカは軍事力をもつて一つ一つ摘んでいくようにしている状況でした。

一方で、南米には多くの軍事独裁政権とその名残が居座っていました。内戦中のコロンビア、チリ、アルゼンチンなどから、軍事独裁制ではなかったメキシコに、亡命者たちや、若者たちがたくさんやって



来ていました。僕自身はメキシコにいて、そうした若い南米の学生たち、亡命者たち、軍事独裁制に抵抗している人々とそこで出会うということになったわけです。メキシコシティの大統領宮殿の前にあるソカロという大きな広場で、そうした学生たちと一緒にアメリカのグレナダ侵略に対する抵抗のデモに加わり、中南米から世界政治を見直すという経験をしたわけです。それによって世界の見え方が百八十度変わってしまったと言っていると思います。

それまでは文明社会の一部に自分も属しているんだという、漫然とした驕りや思い込みが自分にもあったかもしれません。西洋諸国やアメリカと並ぶような文明国日本。しかし、そうした考え方がメキシコで吹き飛び、経済的に繁栄すること、あるいは、政治的発言力や権力を持つことではなくて、社会において全ての人間がある公正な形で、公正な手続きを持って生きるということの重要性、あるいは生の充足の真の意味、生きることの慎ましい尊厳、生きていることの価値や重みというものをまさに生きている現場から肯定していく、そういう考え方の重要性というか、それを求めて世界を新しい目で見るということが自分自身の中に起こったわけです。メキシコや中南米の民衆の世界を見る視点が自分自身に乗り移ったと言ってもいいかもしれません。

「アメリカ」から「アメリカス」へ

その中で二つの大きな学びがありました。それが今日お話しするハーフ・ブリード、混血の民、メステイソとメキシコでは呼ばれている人たちですが、そのメステイソの民が持つて

いる、生きる知恵です。これを一つ学ぶことになります。それは深い知恵、生存のための思想と言ってもいいでしょう。

もう一つは、「アメリカ」という概念を問い直すことです。私がメキシコに行く前は、「アメリカ」は問答無用に「アメリカ合衆国」のことでした。けれどもメキシコに行って、そこで別の視点も得て見直すと、「アメリカ」というのは単に政治的な覇権と経済的な繁栄を代表するアメリカ合衆国という国が、「アメリカ」というより大きな、包括的な概念を十九世紀末に盗み取っていった、そういう概念に過ぎないということが分かってきたわけです。「アメリカ」というのは、アメリカ大陸全体を包み込む複数形の「アメリカス」と呼ばれるような大きな新大陸の先住民文化の上にヨーロッパ、あるいはアフリカ、さらにアジアから人々がやって来て、その経緯自体は、奴隷制であったり植民地主義であったりと問題含みではありますが、先住民のアメリカに黒人や白人やアジア人が膨大な形で移民や奴隷として移り住んで来る中でつくられた「アメリカス」という混合体の精神。これが「アメリカ」というスピリットとして生き続けます。例えばキューバの詩人・思想家のホセ・マルティが北米の物質主義・覇権主義に対抗するかたちで宣揚した「我らがアメリカ」という概念があります^①、チリの詩人・パブロ・ネルーダもそうした複数のアメリカスの存在、あるいは精神性の中で形作られてきたアメリカについて『カント・ヘネラル』などの詩集において熱く語っています^②。そういう「アメリカス」なるものの広範な存在に私自身気がつきました。それによってUSAというものを相対化する視点に目覚めたわけです。

アルリスタの描くメキシコの起源

『ハーフ・ブリード』の表紙には、破れたような絵柄があつて、その中から何かがのぞいています。一冊の本の中に隠れているわけです。私の本のバックボーンを形成するその書物こそ、アルリスタというチカーノ、メキシコ系アメリカ人の詩人が書いた *Nationchild plumaraja* (『民族の子供 赤い羽根』一九七二) という詩集です。⁽³⁾ 『ハーフ・ブリード』という本を、私は長く読みつづけてきたアルリスタと彼の思想に向けてのオマージュとして書いたという意識があります。

この *Nationchild plumaraja* (『民族の子供 赤い羽根』) という詩集を一九七二年に出版したアルリスタという詩人はメキシコシティ生まれですが、十三歳でアメリカのサンディエゴに家族と共に移り、そこからメキシコ系アメリカ人としての新しい自己意識を作つていって、一九七〇年代のアメリカにおける黒人の公民権運動に続く、メキシコ系のマイノリティ運動としての「チカーノ・ムーヴメント」の精神的支柱になった重要な詩人・思想家で、七十歳になった現在もアクティヴに活動しています。

メキシコのメステイソンやハーフ・ブリードたちの自己意識は、混血としてのメキシコ人が生まれることになった五百年あまり前の征服の歴史のいちばん大元のところにつながっています。チカーノ社会では個人の歴史がそうした民族集団の大きな歴史にいつも結び付けられています。つまり、白人の征服者、メキシコを征服したエルナン・コルテスというスペイン人、メキシコのアステカ文明を滅ぼした人ですが、このエルナン・コルテスという白人によってインディオのマリンチェとい

う女性が陵辱され、そして混血児が初めて生まれたという現実の暴力であるとともに、神話的で根源的な意味を持った一つの出来事にメキシコ人の出自が結びつけられています。

マリンチェはいくつものインディオの言葉が話せたので非常に重宝され、コルテスの通訳になりました。同時にコルテスの情婦ともなり、そこで初めての混血児を生むわけです。メキシコではマリンチェは歴史的に言えばある種の裏切り女というふうにして語られることも多い。つまり先住民でありながら、征服者スペイン人に支配され、そして自ら交わり、同胞を裏切り、そして混血の子どもを生んだ。しかしそれが混血のメキシコ人のいわば起源にほかならないわけです。そのことがメキシコ人や、チカーノを含めたハーフ・ブリードたちの自己意識の中で、否定することのできない原初的なトラウマとしてつねに存在し続けてきました。

このことを深く論じたのが、有名なメキシコ人のアイデンティティについての哲学的な著作『孤独の迷宮』(一九五〇)を書いたオクタビオ・パスです。⁽⁴⁾ 混血民族の起源にいる裏切り女マリンチェ。しかし、裏切り女と言つてただちに否定することはできない。メキシコ人にとってみれば、自分たちの神話的な母親なのですから。

ですから、アルリスタが「生まれ来る子ども」という詩の中で自分たちの出自について、すなわち集合的なメキシコ人の出自について考えることの背後には、常にこの原型的な、根源的な神話がある。つまり根から切断されたものが自らの混合体としての始まりをどこに置こうとするのか。結局それはいかに呪われた出来事が始まりであろうと、自分たちにとっては聖なる誕生の物語でもあるわけです。この矛盾の中で、ハーフ・ブリードたちは自分たちの曖昧な存在について厳しく問いつづけ

ることになったわけです。

『ハーフ・ブリード』の中で引用した「ブロンズ・レイプ」という詩は、メキシコ人やチカーノたちがこの根源的なレイプに始まる歴史を今もまだ生きていることを語っています。この陵辱をめぐる原風景は、植民、征服が始まった時に限らず、絶えず彼らの社会的な実存というもののなかで繰り返されている。レイプする白人は、かつてはスペインの植民者だったかもしれないが、今ではそれがアメリカの白人であるというように歴史は動いています。その構造においては大きな変化はない。チカーノたちは今現在、アメリカという強大な白人の支配力の中で多くの差別に日々甘んじながら生きるという暮らしを続けています。

メキシコ人たちはこのようにして、自分の生きている生というものを、最も貧しい、ほとんど否定的なものに辱められてしまふようなところから、もう一度問い直し、そこに新たな意味を与えていくという、強靱な思想を作ってきました。これがハーフ・ブリードの思想です。ここでは生も常に死の側から問い直されます。死は生の終わりではなくて、むしろ生きていることに常に活力を与え続け、生きていることの様々な虚飾をあぶり出す、そういう力を持ったものとして常に捉えられます。そして死によって自らの生を風刺し、茶化す。あるいは、死を風刺し、死を茶化すことによって自らの生を死の側から意味づけし直していく。そういうことを繰り返しています。ハーフ・ブリードの持っているある種の自己風刺的な自己意識、それは「死者の日」というメキシコの習俗にも色濃く現れています。

メキシコの「死者の日」

メキシコには「死者の日」という不思議な習俗があります。十一月の一日・二日、ちょうどハロウィンの時期も重なっている。最近ハロウィンに侵略されてメキシコの「死者の日」の様子も変わってきていますが、本来はインディオの頃からの非常に静かな死者追悼のお祭りだったものです。その後の植民地下でのキリスト教の布教、そして近代的な都市文化の影響もあって、いまは祝いが随分変わってきています。本来はマリゴールドの花びらを先祖のお墓に飾り付けて、死者追悼の一夜を、一族がこの墓のまわりで過ごし、一夜を明かす、そういう特別な日です。

マリゴールドはインディオのナワトル語ではセンパスチル(cempasúchil)と言うんですけど、特別な花で、花びらが長い間強烈な日差しに当たっても萎れずに、非常に長持ちするので、死者の祭壇やお墓を飾る花になっていきました。死者を追悼しているということだけで見れば、日本のお盆と変わらないじゃないかと思われるかもしれませんが、こうした追悼の儀とともにメキシコではこの日に向けて死を象徴する色々なオブジェ、骸骨のかたちをしたお菓子とかパンとかいったものが街中に氾濫するのです。

誰でも、最初メキシコに行つてこの「死者の日」に遭遇すれば、「この人たちは死というものに対しての捉え方が違う」と感じます。そこから、この「死者の日」の習俗の裏にある、深い、生と死の関係性をめぐる民衆的な哲学というものに気がつくわけです。自己意識に関する非常に屈折した思いを、風刺的でユーモラスで内省的なものとして表現する。例えば首都郊外

のミスキックという村では骸骨人形を作って広場で踊らせその出来栄を競ったり、というような娯楽的とも思えるアトラクションがたくさんあります。住民たちもいろんな骸骨の仮装をして一晩中踊っています。

十年ぐらい前に日本の漫画家の水木しげるさんがメキシコで色々な仮面を収集しようとしたことがありました。ちょうど「死者の日」に合わせて水木さんは出かけていって、ミスキックのお祭りを訪ねるのですが、町の人がみんな骸骨の格好をして踊り騒いでいた。水木さんもノリの良い人ですから、すぐ踊り出したところ、その骸骨の踊りの輪の中に引っ張り込まれて、延々と何時間も踊らされたと書いていました。

こんなミスキックの村でも、死者の祭壇やお墓をマリーゴールドで飾り、ろうそくを立て、そこに死者の砂糖菓子のをせたりするわけです。お供え物も骸骨や骨のかたちをした *Pan de muertos* (死者のパン) です。「死者の日」が近づくと、パン屋に普通のパンがなくなつて、全部死者のパンになつてしまい、初めて見る人は本当にぎよつとする。でも、それをみんなが買って食べます。単なるお供え物というだけではないのです。普通だったらコッペパンみたいなパンが売られている棚が、「死者の日」が近づくと全部死者のパンになつてしまう。この時期には、毎朝象徴的な意味で骸骨や骨を食べる。死を食べてしまうわけです。メキシコでは、こうして死というものをいろんなチャンネルを使って自分の中に受け入れていく。死と遊ぶ、死と踊る、死とさまざまなコミュニケーションを取るんです。

恩師 アメリコ・パレーデスとの出会い

二年間メキシコに住んでから僕は国境の河・リオ・格蘭デを渡り、テキサス州都オースティンにあるテキサス大学で一人のメキシコ系の民族音楽学者・民俗学者アメリコ・パレーデスに師事することになりました^⑤。この本のなかにもパレーデスへのオマージュも込めて、恩師について書いた章があります。

彼はブラウنزヴィルというメキシコとテキサスのちょうど国境地帯のテキサス側の町に一九一五年に生まれています。九九年に八十四歳で亡くなりました。元々はスペインからの、四〇〇年ぐらい前のユダヤ系の移民です。スペインから追い出されるようにして出てきたセファルディム系ユダヤ人が父方の系譜です。母方の方は今独立運動でもめているカタルーニャ出身の家系のようです。

テキサスーメキシコ国境地帯にはコリードという一つの民俗音楽の伝統がありました。一種の叙事詩的な民衆歌謡(バラッド)です。吟遊詩人みたいな人たちが、地域のさまざまな場所で起こった出来事をギターを弾きながら歌い、移動しながら伝えていく。新聞、ラジオ、TV、今ではインターネット、そういうものが報道の役割をしていますけれども、十九世紀の終わり、二十世紀初頭には田舎にはこうしたマスメディアはまだ確立されていませんでした。民衆の識字率も低い。ですから、吟遊詩人が出来事をすぐ歌にして、移動しながら口伝えに歌い広めていく、この国境のバラッドのジャンルがコリードです。

コリードはコレル *correr* という、スペイン語の「流れる」という意味の動詞から生まれた言葉です。物語を一切装飾・粉飾せず、直截にストレートに川が流れるように物語を伝えてい

く、というような意味でコリードと名づけられました。

しかもその民衆歌謡が、リオ・グランデというアメリカとメキシコの国境にある大河の周辺に発生したというののもとても興味深いことです。単に物語を河の流れのようにまっすぐに伝えるという意味だけではなく、やはり河がそこにあってその風土から歌が生まれていることが大事です。その河に沿って人が移動していく。その移動の中で物語歌が伝えられていって、それが庶民の日々の色々な情報、そして民族の集団的な尊厳とか、日々の勇気とか、そういうものを歌を媒介にして意識していくという文化がここにあるのです。

このコリードの伝統を、アメリカ・パレーデスは長いあいだ研究してきました。自分が生まれ育った場所で、幼少時から自らギターを弾き、歌ってきたものとも自然な風俗としての表現体。それを学問の対象としてあらためて知の俎上に上げ、メキシコ系アメリカ人の一つの文化エートス、文化的な一つの感情複合体として客観化して研究したわけです。パレーデスの先駆性は際立っていて、彼はチカーノとして初めてテキサス大学でアメリカの博士号を取り、その博士論文を一九五八年に *With His Pistol in His Hand* (『ピストルを手にかまえて』) というコリード研究の著書として出しました。

チカーノという言葉は、黒人の公民権運動が高揚し、それに連動するように一九六〇年代の後半になって初めて生まれた、メキシコ系アメリカ人の社会的自己意識を宣揚する政治的にきわめて覚醒した概念です。それ以前にはまだそうした言葉すら存在しない時代でした。このパレーデスの本は、そのような政治的・文化的覚醒期であるチカーノ運動期以前の時代に、メキシコ系アメリカ人がアメリカにおいて本格的な学問的著作を出版するという、まさに想像を絶することを実現したのです。

民衆の英雄を歌った

「グレゴリオ・コルテスのコリード」

この *With His Pistol in His Hand* という著作が詳細に分析したコリード「グレゴリオ・コルテスのコリード」の内容は、国境に生まれたグレゴリオ・コルテスという一人の牛飼いがある時、弟とともに馬を盗んだという無実の罪で、白人の保安官に逮捕されるところからはじまります。弟がその保安官に殺されそうになり、このグレゴリオ・コルテスがそのシェリフを自分が持っていたピストルで撃ち殺してしまう。そして彼は逃げる。当時の、テキサスの白人の圧倒的な優越と支配の社会環境においては、どのような理由であれ、メキシコ系の人間がアメリカの白人を撃ち殺すなどということは、あつてはならない反乱行為でした。

今「テキサス・レンジャーズ」といえば、ダルビッシュというスターもかつて在籍していた大リーグのチームというイメージしかないかもしれませんが、この時期は実に悪名高い、メキシコ人と見れば平気で殺戮する一種の民族差別集団の名前でした。彼らはテキサスにいた白人の人種主義者たちの武装集団で、メキシコ人を徹底的に排斥していた。略奪や殺戮は日常茶飯事で、それが二十世紀初頭のこの国境地帯の状況でした。

だから、メキシコ人たちは米墨戦争の結果としてアメリカ領土に組み込まれたけれども、アメリカ人としての権利とか自由とかを一切与えられずに差別され続けたわけです。そういう風土の中で、グレゴリオ・コルテスが白人のシェリフを撃ち殺すということはありえないことだった。革命とっていいような

出来事です。こうして彼は逃げた。白人側の警官は追って来るわけですが、逃げて、逃げて、逃げ続ける。なぜ逃げられたかと言えば、当然そこに住んでいたチカーノたちが彼を次々とかくまったからです。出来事のあと、すぐに彼は民衆の英雄となったわけです。つまり、誰もできないことをやった。白人を殺す、それも、ただ殺したんじゃないで、彼の弟がやられそうになったからやり返したのです。そして彼の名前、彼の勇敢な反逆の行為がほんの数週間でコリードを通じて、テキサス全体に広まっていったわけです。

「コン・ス・ピストラ・エン・ラ・モノ」つまり「手にピストルをかまえて」。このコリードの歌詞の一部がパレーデスの研究書のタイトルにもなっていく。こうして一気にグレゴリオ・コルテスという人物はテキサスにおけるメキシコ系アメリカ人の庶民の英雄になるわけです。そして、彼の抵抗が、虐げられつづけていた人々の勇気をかき立てることになります。彼は何カ月も潜伏して人々にかくまわれながら逃げるんですが、最終的には捕まってしまいます。裁判にかけられて、死刑の判決を受けるのですが、いろんな形で彼の命を救おうという動きもあって、権力もそうした民衆の強い想いを無視することができなくなり、最終的には釈放されます。

その出来事以上に、このグレゴリオ・コルテスのコリード自体、その後ずっと歴史の中で様々な新しい歌詞や解釈を与えられ、ずっと現在まで生き続けているわけです。そこにまた新しい出来事や解釈が付け加わりながら、チカーノたちのアメリカにおける様々な実存というものが歌を通じて捉え直されていく。それをアメリカ・パレーデスは著書の中でたどり直していく。自分自身が生まれ育った国境のメキシコ系文化、それ自体はあまりにも深く内部化されているために容易には客観化でき

ないものですが、それをパレーデスはパレーデスなりの一つの決別、自分が生きていた風土から一旦離れるということですが、そうすることによってその全体を知の対象とする。学問とは、パレーデスのような国境の民にとって、一つの決別の行為でもあるのです。彼はそういう重い決断をして、この本を書いた。民衆の中から生まれた吟遊詩人が、風土との大いなる決別の果てに学者になった。彼が僕の師匠になったのもそういう出来事の帰結なのです。

パレーデスの詩「メキシコ・テキサン」

パレーデスの詩をちょっと読んでみます。彼が二十歳の時に書いた、「メキシコ・テキサン」。「メキシコ系テキサス人」というタイトルですが、この頃はまだ、さっきも言ったようにチカーノという政治的なムーブメントをつくる自己規定の概念がまだない時代です。でも、なんとか自分たちの存在を肯定的に示すカテゴリーを創ろうという意識が「メキシコ・テキサン」という一つの詩に結実しました。これは若干風刺的な詩です。面白い詩ですので、少し読んでみます。

メキシコ・テキサンの彼には土地がない

リオ・グランデの両岸で地団駄を踏む

白人野郎の言葉はうまく話せません

舌がからんで気分が悪くなるだけデス

それでもテキサス州の市民だそうぞ

なのに人はなぜかメキシコのすね者なんて呼ぶ

ことばはやさしく、仕打ちはひどい

彼にはどうしても分らない

メキシコ・テキサンの彼には土地がない。

彼が川を渡っても、それはそれで同じように最悪

錆びたスペイン語を磨き上げて冗談を飛ばしても

アメリカかぶれは向こうではいやがられる

ミゲルなんかじゃなくて、おまえはマイクだろ

生粋のメキシコ人はいつだって冷やかしたりわめいたり

「アメリカ野郎のところに帰れ！ 連中のブーツでも舐めてろ！」

テキサスで彼はジョニー、メキシコではファン

でもメキシコ・テキサンの彼には土地がない。(……)

彼には国がなく、旗もない

彼には声もない ただあるのは手

ロバのように働くための手

彼には土地がない。

彼の悲しみを紛らわすにはたった一つの方法

給料日になったら死ぬほど酔っ払うこと

仲間と一緒にばか騒ぎできる唯一の機会

だがメキシコ・テキサンには土地がない

泥酔の果てに見るのは空を飛んでゆく夢

九月十六日、そして七月四日へ。

九月十六日はメキシコの独立記念日。七月四日というのはアメリカの建国記念日です。どちらも自分の国と断言できない人々がメキシコ・テキサン。だから泥酔した夢の中で空を飛んでいて、九月十六日に帰る、あるいは七月四日に帰る、それは絶望的ですけど、結局それは夢でしかないわけです。どちらにも帰属することができない。そういう感覚を、ここではかなり戯れ歌的な文体で、コリードのようなリズムで殴り書きした

という感じです。

彼はこの詩を十九歳か二十歳で書きましたが、公の媒体に発表される前に外部に知られてしまい、いろんなところに流出してしまつて、作者が知らないところでどんどん尾ひれがついて、匿名の詩としてテキサス全体に広まってしまいました。あまりにもいろいろな要素が付け加えられて、自分で書いたものではなくなりかけているということで、パレーデスは彼が当時勤めていた『ブラウンズヴィル・ヘラルド』という新聞にこの詩を掲載し、作者は自分だと公表し、ここで自分が訴えていることはこういうことであつて、これを変な形で解釈したりして欲しくないと言ったのです。いずれにせよ、当時のメキシコ系のテキサス人としての自己意識の宙吊り状態がここにはよく出てくるといえるでしょう。

「メキシコ・テキサン」のコリード発見される

最後にこの詩に関して一つ面白いエピソードを紹介します。ちょうど僕がパレーデスの下で国境地帯のメキシコ系アメリカ人のフォークロアを研究しようとしていた時に、ある別の仲間の学生たちがやはり国境のコリードのフィールドワークをやっていたんです。一九八〇年代です。さきほどの「メキシコ・テキサン」の詩が書かれたのは一九三五年ぐらいでしたが、それから四・五十年近く経った時期に、一人の学生がテキサスの辺境の地で、この「メキシコ・テキサン」と内容的に非常に重なるコリードを新しく発掘しました。それをパレーデスに報告したら、パレーデスもびっくりして、これは自分が作った「メキシコ・テキサン」の詩が、四・五十年かけて流れ流れて、コ

リードとしていろんな人に歌われ続けながら、少しずつ変化してきたものだということが分かったのです。

こうしてみると、パレーデスという人はとても不思議な人で、コリードを最後まで自分の人生として生きたようなところがあります。そういう人物と大学の教室で接し、その深い教えを歌とギターと共に学ぶことができたのは僕にとって決定的に重要な経験でした。

物を学ぶ学問というものの自体、書物とか概念を媒介としたものだけではなくて、身体全体、声、しかも個人の声だけでなくコリードというかたちで代々伝えられてきた集合的な声、声のアートと言ってもいい口承的な文化実践、そういうものに支えられているということですね。そういうものの中にも我々が学問として学ぶべきものがあるんだということ、それがハーフ・ブリードというべき混成主体をいだいた人々が伝えている一つの身体的な文化ということですね。それを僕は直接的にアメリカ・パレーデスという一人の人物を通じて学びとったのです。ご静聴ありがとうございます。(会場拍手)

第Ⅱ部

野谷 どうもありがとうございます。今福さんとはなかなかお話する機会がないものですから、今日は少しまとまった話ができると思うと、とても嬉しいですね。

そもそも、今福さんと直接お会いする前に、僕は間接的に会っているんです。どういうことかというと、先に似顔絵と対面しているんです。新宿に火の子という飲み屋があったんです

けれども、そこで山口

昌男さんが「今福龍太

という男がテキサスから帰ってきた」と、

「こういう顔してるんだ」と言ってるんだ」

と、その場で似顔絵を描いて

見せたんです。そして

ら、その後直接会ったとき、そっくり同

じ顔をしていたので

びっくりしてしまっ

たということがありました(笑)。

今福 山口さんの似

顔絵の才能はそれこそ

天才的でしたね(笑)。

カルロス・カスタネダの『ドン・ファンの教え』

野谷 さて、前から聞いてみたかったのは、この本にも出てきますが、カルロス・カスタネダの『ドン・ファンの教え』シリーズ⁽⁸⁾。これは一時期ブームになりました。中沢新一さんもこれを読んで、『チベットのモーツァルト』を書いたとか、チベットではないけれどネパールに行ったとか、いろいろ噂が飛び交いました。

今福 六十年代の終わりぐらいですね。カルロス・カスタネダ



がドン・ファンというメキシコのヤキ族のインディオの呪術的世界のなかに入っていく。それは人類学のフィールドワークのような体裁を一応取ってはいたんですが、かなり架空の物語を含む。『ドン・ファンの教え』シリーズのドン・ファンはシャーマンですね。メキシコのシャーマンに弟子入りするペルーからの移民人類学者による哲学的な物語です。幻覚性の植物を食べたりトリップして、いろんなシャーマニスティックな経験をする。その当時のアメリカにおけるヒッピーやビートニク世代の自己発見の時代に登場したカスタネダは、そういうブームにピッタリ合ったんです。

野谷 そうですね。すると今福さんはどうやってカスタネダと出会ったのでしょうか？

今福 六十年代の反体制的な若者たちの動きの中で、自分の実像みたいなものを徹底的に洗い出していく自己探求。そういう時に、一つのきっかけになったのは、やっぱりインディアンだったり、先住民のシャーマニズム的な部族文化なんです。というのもその時代に近代がつくってきた人間の理性に対する強い疑い、問い直しがあったからです。合理主義の中で、理性と言語操作によって物事を突き詰めていく文化の延長線上に、人間に本当の幸せな未来があるんだろうかということに対する大きな問いかけですよ。

一九六〇年代、一九七〇年代というのは近代文明の矛盾が一番はつきり見えた時でした。例えば公害の問題。水俣病が始まったのは五十年代半ばからですが、六十年代にその事実がはつきりと見えてきて、人間が合理主義の中で産業社会をつくっていく先に、必ずしも幸福な世界が待っているんじゃないということに人間が初めて気がついた。そんな時に、先住民の文化が再注目されたんです。

僕自身がメキシコに関心を持った大元に当然そういうものがあつただろうと思います。その中には当然カルロス・カスタネダのような人がいた。そのとき、多くの人類学者はもちろんメキシコでも調査し、研究書も出していましたが、それは学術的なものであって、どっちかというとそうした学問としてどれだけ権威的に書くかという仕方でも成立している本が多かった。カスタネダは、そういう身振り自体も結局は近代社会のある権威的な側面を強化してしまうと考え、あえて学問の身振りや躰けを破壊するようなことをやりました。つまり寓話として書く。その方法論に僕は惹かれました。学問や勉強がそんなにいかめしくて権威的なものではないんじゃないかということ、カスタネダのような人は、僕らに語ってくれたんです。

世界というものの未来に関わる大事なこととして、人類が維持していかなければならない何かがそこに眠っていて、それを発見し、発掘していく。そういう作業が学問といういかめしい、権威的なものをつくることによって逆に見えなくなっているのではないかという問いかけが僕には強くあつたんです。そんなときにカスタネダみたいな人が出てきて、学問というものを杓子定規に、マニュアル通りにやらなくてもいいんだ。もっと物語的な学問、それこそコリードのような語りの自在さを持った学問があつていいんだということを確信させてくれたわけです。

野谷 山口昌男さんもそういうところがあつて、それまでの岩波的な教養主義文化をちよつと茶化すみたいなのところがありましたよね。

今福 そういう人たちが日本にも七十年代には一定数いたわけですが、それで、僕にしても、野谷さんにしてもそうかもしれませんが、そういう人たちとの交わりの中で自分の学問をつくってきた。

野谷 やはり鶴見俊輔さんがグアダルーペの聖母について書いた本とか。あれなんかもやっぱり視点が今までの教養主義ではありませんね。

今福 そうです。あの頃、メキシコに行って大きな自己発見をした一群の人たちがいました。鶴見俊輔さんは『グアダルーペの聖母』を書いた。それから大江健三郎さんがやっぱりメキシコ滞在後に非常に優れたエッセイを書いて、『小説の方法』のなかでホセ・グアダルーペ・ポサダという、正に骸骨をモデルにして版画を描いた、先駆的な版画家・挿絵画家について初めて日本で紹介した。その次に山口昌男さんがメキシコに行った。オクタビオ・パスとの非常に親密で刺激的な関係がそこから生まれた。そういうつながりですね。

逃避と潜伏の場としての南サウス

野谷 講演の中では、ボーダーの話が随分出てきました。僕はそのボーダーというのを意識したのは、一九七〇年代から非常勤講師を務めていた津田塾大学で、ダグラス・ラミスという先生と話をしたときに廻ります。この人は元米軍の海兵隊員で、沖縄の基地に駐留したのち退役して、ベ平連に参加した人です。彼らはヴェトナム戦争からの脱走兵を救ったりしていましたが、ラミスさんも一種の離脱者と見なせると思います。

今福 もう長く沖縄に住んでいますね。

野谷 ええ。その人が当時津田塾大学の国際関係学科の教員になれたところに、津田塾大の反骨精神が感じられますが、僕がスペイン語を教えていると知った彼からグレゴリー・ナヴァ監督の『エル・ノルテ』という映画が面白いということ

を教えられました^⑩。そこからなんです、僕がボーダーを意識しだしたのは。グアテマラの先住民系農民のリーダーだった父親が軍に殺されて、故国を脱出した兄妹が、苦難の末に国境を越える話ですね。

今福 グアテマラという中米の混乱した国から脱した人が、メキシコを通過して更にアメリカとメキシコの国境を苦難の末に越え、カリフォルニアに入って不法移民として働くという話でしたね。『エル・ノルテ』、字義的には「北」という意味ですが、中米の人々にとっては、北の大国、夢のアメリカを象徴する言葉です。

野谷 そうですね。だから、いろんな意味で象徴性があります。繁栄した北、憧れの北、けどなかなか辿りつけない北、しかしいざ行ってみると、北にもいろんな問題がある。

今福 ヴェトナム戦争期から、アメリカで良心的兵役拒否の思想の意味があらためて真剣に語られ始めました。さきほどの野谷さんが触れられたダグラス・ラミスさんも、沖縄に海兵隊員として駐留し除隊したあと、そうした運動に関わられていますね。アメリカにとつての「南」であるメキシコという土地は、アメリカの好戦主義に異を唱える人々の逃避・潜伏の場でもありましたね。

野谷 昔からそうでしょう。結局南へ下るといことは、「サウス・オブ・ザ・ボーダー」という歌もありますけれども、南に逃げるということでもあります^⑪。

今福 アメリカのならず者も、メキシコの国境を越えて南に入ればもはや追跡されなかった。そういう場所としてもメキシコはあったし、逆にメキシコの側から見ると、ノルテ、つまり北の繁栄があつて、南から北への経済的・労働市場的な動きがある。アメリカの側から見ると、アメリカの法秩序や体制からド

ロップアウトした人が南に逃避の場を求める。

野谷 『オン・ザ・ロード』のジャック・ケルアックとか、あれなんかはやっぱ南、メキシコに行っているわけです。

今福 ビートニクの人たちも正にメキシコを楽園とみなして、ジャック・ケルアックもウイリアム・バロウズもみんなメキシコで生活していますよね。

野谷 同様に、『イージー・ライダー』とか『明日に向かって撃て』とか、あの手のアメリカン・ニューシネマにもやっぱ南を指すという方向性を感じますね。

今福 トランプのメキシコというのはそういう歴史というかイマジネーションが全く欠落しているんです。彼はただ単に厄介者をメキシコに追放すれば、それで、アメリカは安全だという発想ですけれども。元々アメリカ人にとってのメキシコの持っている、無法地帯だけれども、同時にそれがアメリカの思想的多様性の安全弁になっていて、実はそういう中にアメリカに対する本質的な抵抗者が潜伏して、批評を行っていく状況もあったわけです。

野谷 そう。だから、『冷血』の犯人だって、メキシコに逃げましたよね。⁽¹²⁾つまりとんでもない連中もメキシコに行っている。アメリカの方から。それを全然トランプは考えていませんね。

ヴェトナム戦争とメキシコ人

今福 とんでもないと言えば、テキサスやカリフォルニアのチカーノ（メキシコ系アメリカ人）にとつての二十世紀における集団的経験として最も重大な出来事の一つがヴェトナム戦争でした。六十年代の後半から七十年にかけてのことで、自分た

ちの民族的なマイノリティ運動がもつとも昂揚した時期とヴェトナム戦争が重なりました。それについてもこの『ハーフ・ブリード』の後半のところで書きましたが、アメリカはその時非常に悪らつなことをした。それは、ヴェトナムに送り込む兵士の割合です。徹底してメキシコ系の人間を徴兵したんです。統計的には正確には出てこないんですが、当時のメキシコ系の人々の感触からすれば、ヴェトナム戦争の犠牲者の半分ぐらいがメキシコ人という印象なのです。自分たちが送り出した友人や家族。メキシコ系の若者たちですね。みんなヴェトナムに元気で出かけて行って、棺に入って帰ってくる。だからヴェトナム戦争のショックということが言われますけど、とりわけメキシコ系のコミュニティにとっては、大きな喪失感の中でヴェトナム戦争を体験したんです。だから、ヴェトナム戦争に対する反戦運動というのは、メキシコ系のアメリカ人の社会参加の運動の中で最も強く盛り上がっていきました。

その時に、メキシコ系の人間には二つの選択肢がありました。一つはアメリカという国家に忠誠心を示すために、徴兵されたらヴェトナムに行つて、アメリカのために戦うという選択です。彼らはなんの疑いもなくアメリカのために死んだわけではないのです。ただ民族全体の集団的なアメリカ国家における地位を少しでも上げるためには、自分たちがヴェトナム戦争でアメリカのために戦つて、国家に貢献すること。それがメキシコ系のアメリカ人にとって、一つ国民化の通過儀礼でもあったわけです。これはちょうど第二次大戦の時に日系人が経験したことと同じですね。もう一つの選択肢は、兵役にはとても耐えられない。自分たちが今まで排斥されていて、その排斥されていた国家の権力によって自分たちがヴェトナム戦争に送り出される。敵とされているヴェトナム人は、むしろメキシコの農民

と同じ生活者として、強い親近感がある。まるで同胞を殺せと言われているような感覚ですね。そんなことを承諾できるわけがないと言って、メキシコに、すなわち自分たちの祖先の故郷に帰った人たちもいたわけです。そういう時にもメキシコとアメリカのボーダーというのはヴェトナム戦争をきっかけにして二つに揺れました。

アメリカ・パレーデスの兄弟にもメキシコに帰ったお兄さんもいるんです。逆にパレーデスは志願した。ところが、ちょうど戦争が終わったんです。ですから、彼は *The Stars and Stripes* (星条旗新聞) という米軍の機関紙に相当する新聞の記者として日本に來ます。戦争が終わり、米軍の進駐がはじまったころなので、それが彼にとつての従軍の一つの形態になるんです。そこで東京裁判を克明に最前列で取材して、それをアメリカの *The Stars and Stripes* と、メキシコの総合紙との両方に報道として伝えた。だから、戦犯を決める東京裁判を、アメリカの軍の機関紙と、メキシコの新聞に英語とスペイン語でそれぞれ報道した記者は、なんとチカーノ、メキシコ系アメリカ人だったことになります。

チカーノ研究のあけぼの

野谷 僕は一九九二年、コロンブスアメリカ大陸到達五百周年の年に、カリフォルニア大学アーバイン校(UCI)に一年間研究しに行ったんです。その時に、大学でイスパニスタの国際学会A I Hの世界大会があつて、そのときに初めてチカーノ・スタディーズというセッションが出来たんです。それは非常に画期的なことで、それまでチカーノ研究は個々にしか行われ

ていなかった。UCIのスペイン・ポルトガル語学科にはジョン・ブルース・ノヴォアのような優秀なチカーノの研究者がスタッフとしていたし、アレハンドロ・モラレスのようなカルロス・フエンテスが『埋められた鏡』という評論で言及している作家もいました。でもスタディーズとして講座ができたり、学会でセッションが設けられたのは、そのときが最初なんです。

今福 僕の師匠だったパレーデスは、チカーノ研究という枠組みから見ればあまりにも先駆的ですけど、もうちょっと年齢が低い、でも、チカーノの学者としてアメリカで教え始めた第一世代、一・五世代ぐらいにあたるような人たちは、ほとんど全てチカーノ研究とか、メキシコ系アメリカ人研究とか、そういう専門で自分たちの学問を形成することができなかったんです。だから、ほとんどの人は英文学などを学び、まずシェイクスピアとかそういうものの専門家になる。それはそれしかなかったからですね。そうした専門研究においてしか学位を与えられる可能性がなかった。だから、それをやむをえずやったんだけど、その中から自分たちの学問を少しづつ創つていて、それで学生たちに対して少しでもチカーノの作家が書いた英語の小説とか文学を読ませる。それも最初はおおっぴらにできなくて、大学に隠れてやっていたわけですけれども。少しづつ領域を広げて、それでようやくチカーノ・スタディーズみたいな学問を大学の中で認知させるというところまで、何十年とかけていくわけです。

野谷 もちろん、そこに至るまでには紆余曲折がありました、やっぱり公民権運動というのが大きかったですよね。あれで黒人に一番スポットライトが当たりましたけれど、それに触発される形でチカーノも運動を開始する。いわゆるチカーノ・ルネッサンスが起きるんですね。特に演劇とか映画とか、ああい

うジャンルで大きくブレイクしたというところがありますね。

今福 そうですね。最初にご紹介したアルリスタという人は、演劇もすごくやっている人で、チカーノ・ルネッサンスの基礎を築いた人です。アルリスタはほとんど日本で知られていないし、紹介もされていなくて実に残念なことですけど。途方もない詩人で、今回、僕自身は彼の一冊の詩集 *Nationchild plumaraja* (『民族の子供赤い羽根』) にほとんどオマージュを捧げるような感じで自分の本を書いてしまった。それだけの重みと価値と輝きを未だに持っている。そういう詩人です。

野谷 今はすごく洗練されてきているけれど、最初はやっぱり農民運動と関わっていたり、そういう現場に行き野外劇をやって啓蒙するとか、ちやうどガルシア・ロルカの移動劇団「ラ・バラッカ」みたいな、あんな感じでやっていたわけですね。

今福 そうです。そういう動きはずっと今でも続いています。チカーノも黒人もそうだけれども、本を書くということも大手の出版社から本を出すということもチカーノはずっとできなくて、しかたなく、自分たちの手作り本みたいなものをひたすら作って流通させていました。でも、それが結局は運動の一番のエネルギーになって、ロドルフォ・ゴンサレスの『俺はホアキンだ』とかアベラルド・デルガードの『チカーノ』とか今ではもう歴史的な詩集がたくさんあるんですけれども、そういう本は今見るとびっくりします。ホチキス止めの粗末な冊子のようなもので、そんな詩集や小説集がたくさんあるんです。それがアメリカにおけるチカーノ共同体に大きな影響を及ぼしてきた伝説的な書物なのです。

野谷 『俺はホアキンだ』は、一九八一年にロサンゼルス空港の売店でたまたま売っていたのを買いました。その詩集がどういうものであるかを知るのは後になってからですが。

映画『ラ・バンバ』

野谷 さっきコリードの話が出ました。この本でも語られていますが、『ラ・バンバ』という映画のなかでプロデューサーがメキシコ音楽はだめだ、歌詞を勝手に変えると批判する場面があります。あれはコリードの即興性の否定ですね。でも主人公はめげずメキシコのフォルクローレをロックにアレンジして成功する。あれも一種のチカーノ映画だと思っんですけど。

今福 そうですね。

野谷 主題歌をはじめあの中の歌はロス・ロボスが歌っています。そしてそのロス・ロボスのヴァージョンはリッチー・ヴァレンスのカバーということになりますが、バンドとしての彼らのオリジナル曲の歌も聴けばコリードの流れから来ていると思うんです。それがロックと混じり合う。

今福 ロス・ロボス。カリフォルニアにおけるメキシコ系の最高のバンドの一つですね。政治的なメッセージも十分にあるし、コリード的な叙事詩の伝統も引き継いでいるし、それにダンス的なエンターテインメントをとり入れて、『ラ・バンバ』はチカーノ演劇の創始者ともいえるルイス・バルデスによって映画化されましたね。

野谷 あれは商業的にも成功した映画ですね。その前にルイス・バルデス監督には『ズートスーツ』という映画があつて、それがヒットしてチカーノ映画がある程度知られるようになる。その勢いでバルデスは『ラ・バンバ』を撮るわけです。

今福 この辺はさつきちよつと話したように、チカーノという意識の前に、カリフォルニアの都市に住んでいるメキシコ系の

アメリカ人がギャングというか、仲間内の文化を作っていました。ズートスーツみたいな自分たちの独自のファッションを作って、前チカーノによるサブカルチャーが出来上がってくるんです。オクタビオ・パスがパチューコと言った、そういう集団です。

野谷 『ズートスーツ』というのは、チカーノの若者というかパチューコの冤罪事件を扱った一種のミュージカルで、プレヒトの『三文オペラ』を下敷きにしているようです。いずれにしろ、ミュージカルでもって事件の成り行きを伝えるという。つまり、いきなり抗議するという政治的運動ではなく、文化的フィルターを通して行きます。その辺の戦略が功を奏して、チカーノだけでなく一般にもだんだん受け入れられるようになっていったんじゃないかという気がします。

メキシコ起源のアメリカ食文化

今福 今のアメリカ文化もハイブリッドであって、トランプは全てのメキシコ人を排斥すると言っていますけど、アメリカ文化の中に根付いたメキシコ的な、例えば食文化、タコスとかナチョスとかタバスコ・ソースとか、あれはもうほとんどアメリカ人が、白人も日常的な食べ物として食べている。もうおよそメキシコ的なものじゃなくなって、今のアメリカのベースに組み込まれて存在している。

野谷 日本ではそのあたりの経緯は知らないままテックス・メックスというハイブリッドになったものを受け入れています。それをアメリカのものだと思っている人もいるし、メキシコのものだと思っている人もいるのが面白い。

今福 沖縄で発祥したハイブリッド料理にタコライスがありますね。タコスの肉をトルティーヤに包むのではなくてご飯の上に乗せるからタコライス。あれもおそらくは沖縄の米軍基地に在るメキシコ系の兵士が好んで食べていたタコスタコスを、金武町のキャンプ・ハンセンのゲート前で食堂を営んでいた沖縄人が取り入れてつくりあげたものようです。タコスは日本にまで飛び火しています。

カフカの「雑種」

野谷 この『ハーフ・ブリード』という本には、メキシコ、あるいはボーダーの話が書かれています。そこにカフカが出てきますね。

今福 はい。この本を書く時に、混血やハイブリッドや雑種の問題をどこまで普遍化して書けるかということを自分でも考えていました。でも、それはあまりにやりすぎると、メキシコやチカーノ世界と自分がずっと関わってきた歴史が散漫になってしまうので、そのバランスにすごく気をつけて書いていました。混血の問題を、あまり一気に普遍化しないで書くかと思っただけです。ただ、カフカの章に関してはちょっと特別な感じがします。カフカはユダヤ系でありつつ、チェコのプラハにいてドイツ語で書くという、すごく複雑で屈折した状況で小説を書いた人ですが、当時のユダヤ人にとって混血・雑種ミシュリンクの問題はすごく本質的だったわけです。偶然メキシコのカフエで、ある若い俳優がカフカの「雑種」を演じていた、一人芝居として朗読していたと言ってもいいんですけど。これは羊と猫の雑種について物語です。自分が父親から遺産で受け継いだ動物がいるんで

すけど、その動物が羊と猫の雑種なんです。一体この羊と猫の合いの子をどうやって育てていったらいいのかと悩んでいる主人公の話です。

その中でカフカが考えているのは正にハーフ・ブリードのことです。それをメキシコのある若い俳優が演じていた。その経験の中から、メキシコとカフカが重なっていった。しかも、その「雑種」という短編を最初にスペイン語に翻訳したのがボルヘスなのです。カフカの短編を最初にスペイン語に訳したのがボルヘスだという事実。これも含め、ボルヘス訳のカフカをスペイン語で読むという刺激的な経験をする中で、カフカにおける「雑種」の問題が僕自身のメキシコのハーフ・ブリード探究の経験に接合されていったんです。

オクタビオ・パスとの出会い

野谷 『ハーフ・ブリード』の中には、作家とか詩人とか作品が個別に存在すると同時に、それがそれこそハイブリッドになつて次から次へと出て来ます。その中で重要な詩人がオクタビオ・パス。今福さんは必ずと言っていいほど引用されますよね。

今福 そうですね。

野谷 今福さんにとつてのパスというのはどんな感じですか？。実際に会われたんですか？

今福 はい。会いました。

野谷 僕もパスには一九八四年の来日時に会っていますが、今福さんの印象は？

今福 何回か会っているんですけど、親しく話したのはテキサ

スに居た時です。彼がテキサス大学に講演に来たので聞きに行きました。彼はちょうど *Tiempo nublado*（『曇り空』一九八三）という本を出した直後で、つまりここで非常に鋭いアメリカ論を書いた直後だったんです。パスは、『孤独の迷宮』の頃からずっと最後まで、チカーノたち、アメリカに渡ってしまったメキシコ人たちの末裔たちがこういう圧倒的な力の不均衡の中で何を考え、その中でメキシコというものをどういうふうに表現し、生きていくかということに関心を持ちつづけていたと思うんです。そんな話をした覚えがあります。

アメリカという場合はオクタビオ・パスという詩人にとつて決してよその国じゃなくて、やはり自分について、メキシコ人という人々について考えるための一つの鏡になっています。パスも小さいときにアメリカで暮らし、その後また外交官としてアメリカに行つて、ハーバードでも教えてという形で、アメリカには何度も行っている。とりわけ若い時にカリフォルニアに外交官として行つた時に、パチューコというメキシコ系の若者たちが自分たちのサブカルチャーを作つて、なかば自暴自棄になつてエネルギーを空回りさせながら、ヤクザ言葉みたいなものを使って生きている状況を発見した。パスの考えるメキシコ人の正に混血のトラウマがここに露呈していたわけですね。混血児として生まれてきた、裏切り女によつて生まれてきた子どもたち、イホ・デ・ラ・チンガーダ、今日はその話はできなかったですけど。レイプされた女の息子という侮蔑語にして、痛苦の自己規定ですね。イホ・デ・ラ・チンガーダはメキシコ人が使う悪態の最後の言葉にして、自らの起源を喚起するための魔術的な言葉でもありました。

野谷 危ない相手に言うとは本当に喧嘩になりますからね。

今福 そう。日本では存在しないような悪罵の言葉ですけど、

その意味を最も深くオクタビオ・パスは探求した人でした。そしてそれがパチューコという、アメリカに渡ったメキシコ人たちの中で一番結晶化して、凝縮されて生きられているということに気がついた。

野谷 しかも、それを今度はインド体験と結びつける。

今福 だから、遠いところに、自分たちを考えるための種がいろいろ仕組まれているということをパスは僕らに教えてくれる。その部分で僕は一番パスに惹かれてきました。アメリカで会った時もそんな話をしていました。僕が、出たばかりの彼の *Tiempo nublado* (『曇り空』) を差し出したら、そこにパスはサインをしてくれました。そしてひとこと *¡lepi!* って書いてくれたんです。「跳躍!」ですね。スペイン語なら *salto!* でしょう。パスのキーワードですね。印象的な出会いでした。その後ずっと読み続けて、今でも読み続けて、『孤独の迷宮』という不朽のメキシコ人論を翻訳してくれと言われているんですけども、なかなか時間がなくて。あれは二つすでに翻訳があるのですが、どちらも訳文がやや読みづらいつ一般的に言われている……。

野谷 つまり、パスの文体は今福さんと同じなんです。詩人だから、詩的でかつ知的で論理的、それを同時に表現できる人はなかなかいない。だから、やっぱり今福さんがやらなきゃダメですよ。

今福 野谷さんの前で「やります」とあらためて宣言しておきます(笑)。分からないことは野谷さんにどんどん聞きますので覚悟してください。メキシコの歴史に関してのすごく複雑な議論もしているので、大変な難物なんです。

野谷 彼はある意味、今言った、正に複雑なんですけれど。何と言ったら良いか……、うまい言葉が出てこないな。

今福 詩人でありつつ、やっぱり批評的な文章においてあそこまで研ぎ澄まされた直感力と、しかも、ベースにある教養の大きさも同時代の西洋人のこれまでの文学や文化に対する教養力をはるかに上回るようなものを持っている。

野谷 そうなんです。しかも、素直じゃないんです。わずかに斜めなんです。

今福 そこはスリリングです。それはやっぱり我々にとつて西洋やアメリカをそのまま受け入れることはできないでしょう。本当に真剣に自分たちの置かれた歴史を考えると。だから、やっぱりパスのような屈折というか、ちょっとはすから見ても、本当に精巧な……。

野谷 思い出した、天邪鬼と言いたかったんだ。

今福 天邪鬼。でも、否定的な意味での天邪鬼じゃないですよ。ね。パスの場合。非常に透明なというか、実に切れ味の鋭い。

野谷 本当に鋭いですよね。彼の批評を訳すとき、自分が鋭い刃物を持たされた気がするほどです。ですから、その本を訳すのだったら、それを先にして欲しい。

今福 『ハーフ・ブリード』でもあちこちでパスの言葉を引用していて、野谷さんも多分気付かれたと思うんですけど、「純血主義者は他者とは話さない。純血主義者はただひたすら神と話し、自分自身と話すだけだ」というパスの一節があるんです。これもハーフ・ブリードの真逆、純血主義、ピューリタンについての見事な論評で、純血主義者は神と話し、自己と話すけど、他者とは決して話さない。これはすごく直感的ですが、いまのアメリカを透視するようなものすごく鋭い直感力があります。野谷 しかも、彼の初期から論点が他者論ですよ。言ってみれば。それをずっと続けてきているわけで。たしか、彼には若干インディオの血が入っていますね。

今福 もちろん入っています。強く自らのメスティーソ性を意識している人でしょう。

野谷 自分の中の他者性ということにこだわるし、メキシコ人の他者性というのにももちろんこだわる。メキシコと他者論ということですが、そこには実感があるんですね。頭の中で考えた他者論ではないと思います。

今福 だから、純血主義者は神と話し、自分と話すだけであって、他者とは決して話さない。これは今のトランプそのものです。本当に今の状況をパスは七十年代に予言するような形で書いています。その時に、ハーフ・ブリードであるメキシコ人たちが、内向きになって自分自身とただしゃべるだけのアメリカ人、自閉してしまっているアメリカをどう解放できるかという、ものすごくアクチュアルなテーマにつながってくると思うんです。「アメリカス」と複数形で今日語ろうと思ったのもそういうことです。そうになると、トランプが排除して押し付けようとしているものは何かと言ったら、正にそういう包容力のある開放的な考え方、そういうものを全部押しつぶそうとしているわけです。

野谷 豊穣なものを全部薄っぺらなものにしてしまうという、そういう感じですね。

今福 雑多なもので混じり合っているものほど豊穣なんですけど、それを豊穣と認めない。ピュアなもの、純粹なものの方に価値をただ与えていく。今のトランプだけじゃない、アメリカのいろんな意味での非常に狭量な白人至上主義は全くそういうものです。他者とコミュニケーションする可能性を自ら断ち切って、自分たちの内にこもるということを平然と主張して、それにまた大統領がお墨付きを与えたりするから、ますますそういう人たちは図に乗っていくわけです。

野谷 日本にはその真似をしてほしくありませんね。

今福 それから、スペインにしても、今いろいろと政治的な動きがありますけれども。元々スペインはイスラムやユダヤを排斥する前には種々雑多なものが共生する土地でした。

野谷 三文化が融合とまではいかないまでも、少なくとも共存していた。

今福 同居する下地を持っているにも関わらず、正にコロンプスの時ですけど、近代が始まる時にイスラムというものを教条的に追放して、それで純粹なカトリック国家スペインを作った。**野谷** それを批判できるのは結局、スペイン人じゃなくて、やっぱりパスとかフエンテスとかそのメキシコ人たちなんですよ。

ファン・ゴイティソーロのメッセージ

今福 そうです。ただ、それをスペイン人としてやったのが、ファン・ゴイティソーロという、つい七月に亡くなった、バルセロナに生まれたスペイン人作家です。⁽¹⁾ フランコが出て来た時にゴイティソーロは幼かったので、そうした独裁的な社会状況に巻き込まれ、自分はフランコの息子だと後に苦々しく語っていましたが、徹底的にスペインが他者を排除して、カトリック純血主義で固まろうとしたのがフランコの独裁制です。それに耐えられずに彼はバリの亡命して、その後モロッコに移住し、ずっとイスラム文化圏の政治状況をルポしながら、最後はマラケシュで亡くなりました。彼がなぜイスラムというものに近づいていったかということを考えると、それはスペインというものが歴史的に負っている原罪みたいなものがあって、それを彼

はなんとか償おうとする。そして、いろんな文化が共生していく、そういう可能性を民衆イスラム社会に探ろうとする。

野谷 しかも、彼はカタルーニャ人ですね。

今福 カタルーニャの生まれですけど、父系はバスクです。しかも、曾祖父の代にバスクから当時のスペイン植民地キューバに出奔したバスク人。それでキューバで黒人奴隷を使ってプランテーションで大成してバルセロナに戻ってきたんです。今、カタルーニャでいろんなことが起こっていて、モロッコ人が車で突っ込んでいったと言われ、イスラム系の人間がまたテロリストとして悪役になっていきますけど、それはあまりにも表面的な見方で、実はずっと長い間イスラムを排斥してきたのがスペイン及びヨーロッパです。例えばサラエヴォのボスニア内戦の時に、なぜゴイティソローロみたいな人があの戦場にでかけて行って、イスラムのムスリム人たちの苦境を世界に向けて伝えようとしたのか。それは、旧ユーゴスラヴィア、ボスニアでも同じようにあからさまなイスラム排斥があったからです。

野谷 スーザン・ソントグが出かけて行ったのもそういう理由からでしょうね。

今福 ほとんどスーザン・ソントグとゴイティソローロだけでした、銃弾の飛び交うサラエヴォに行ったのは。他のヨーロッパ人は見て見ぬふりをしていた。自分たちの原罪というものを本当に見つめようとしなかった。いまの一般の人々がそうした健忘症に陥って、なんとなくイスラム教徒＝テロリストという図式でもって今世界を見ているとしたら、これはもう大変な間違いで、むしろ排斥的な言動をしてきたのはもっぱら白人やヨーロッパ人たちの方であって、イスラムの民衆的な文化というのは実は最も包容力のある、他者と共生してきた文化なんです。イスラムの原理主義的な国家が教条的で頑ななイスラムという

イメージを作りすぎていますが、民衆的なイスラム文化というのはそうしたものは全然違うものだったんですね。ゴイティソローの仕事は、すべてそうしたメッセージを強く語ろうとしています。

野谷 だから、そっちを見てほしいですよ。日本の今日、ヘイトスピーチをやるような人たちというのは全く無知で、そういうことを知りません。せめてこの本を読んでくれれば、ヘイトスピーチという現象にも変化が起きるだろうという気がします。

今福 そういう希望はどこかすかに持ちながら常に書いてるんですけど。

おわりに

野谷 最後に、『孤独の迷宮』の新訳が出るのはすごくうれしい。これは皆さんにとって朗報です。

今福 『ハーフ・ブリード』の中でももちろん旧訳を使うことは一切せず、パスの原著からあらたに自分で訳しています。¹⁶『孤独の迷宮』の全訳は岩波文庫からもう



十年近く前に依頼されていて、岩波文庫でやるということはある意味でこの本の決定版を作らなきゃいけないということなので、ちょっと簡単にはできないことで、ずるずると時間がかかっています。ですがあらためて心を入れ替え、頑張つて近々に完成させたいとこの場で宣言しておきたい思います。

野谷 こんなに長く最後まで残ってくださったみなさん、ありがとうございます。なんだか一番楽しんでいたのは我々かもしれませんね。

今福 そういう空気が聴衆の方々にも伝染したのであれば、嬉しいことです。今日は本当にありがとうございます。

野谷 こういう刺激的なお話がまたできることを願っています。ありがとうございます。

(二〇一七年十月十一日、午後二時—四時三十分、

名古屋外国語大学五一教室、

構成・注 伊藤達也)

注

- (1) José Martí (一八五三—一八九五) キューバの詩人・思想家。詩人としての活動の傍ら、生涯キューバの独立運動に身を投じた。『ホセ・マルティ選集』日本経済評論社、一九八八・二〇〇五。
- (2) Pablo Neruda (一九〇四—一九七二) チリの詩人、外交官、政治家。代表作に『マチュピチュの頂』、『カント・ヘネラル』、『ネルーダ回想録』等。一九七一年ノーベル文学受賞。
- (3) Alurista (一九四七—) *Nationchild plumaraja*, San Diego, Centro Cultural de la Raza, 1972.
- (4) Octavio Paz (一九一四—一九九八) メキシコの詩人、批評家、外交官。代表作に『鷲か太陽か?』、『弓と堅琴』、『孤独の迷宮』等。一九九〇年ノーベル文学受賞。
- (5) Américo Paredes (一九一五—一九九九) テキサス大学教授。米墨国境地帯の文化を研究。コリード研究、チカーノ研究の先駆者。
- (6) 新宿西口にあった伝説的な文壇バー。日本を代表する学者、編集者、作家

たちの社交場になっていた。

- (7) 山口昌男 (一九三一—二〇一三) 文化人類学者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長、札幌大学学長。代表作に『人類学的思考』、『道化の民俗学』、『歴史・祝祭・神話』、『文化と両義性』、『敗者』の精神史』等。『トリックスター』、『周縁と中心』等をキーワードに画期的な文化論を打ち立てた。
- (8) Carlos Castaneda (一九二五—一九九八) バル出身のアメリカの作家、人類学者。ドゥルーズ・ガタリが『千のプラトー』で『器官なき身体』という概念を導入する際にカスタネダのドン・ファン・シリーズを引用した。
- (9) Charles Douglas Lummis (一九三六—) カリフォルニア大学バークレー校卒業後、一九六〇年に海兵隊として沖縄に駐留。除隊後、日本に移住しベ平連に加わる。一九八〇年津田塾大学教授、二〇〇〇年に退職。代表作に『経済成長がなければ私たちは豊かになれるのだろうか』、『なぜアメリカはこんなに戦争をするのか?』、『憲法は、政府に対する命令である』、『要石沖繩と憲法9条』等。
- (10) Gregory Nava (一九四九—) メキシコ系アメリカ人の映画監督、脚本家。『エル・ノルテ／約束の地』(一九八三)では不法移民の目からアメリカを描いた。
- (11) *South of the Border* (一九三九) 同名映画のために書かれた歌曲、ジミー・ケネディー (作詞)、マイケル・カー (作曲)。メキシコへの旅を哀愁的に歌い、アメリカで多くの歌手にカバーされた。
- (12) 『冷血』(一九六五) カンザス州の農場で起こった殺人事件を扱ったトルーマン・カポーティのノンフィクション作品。
- (13) García Lorca (一九八八—一九三六) スペインの詩人、劇作家。詩集に『ジプシー歌集』、『ニューヨークの詩人』、戯曲に『血の婚礼』。一九三二年に学生劇団『ラ・バラッカ』を創設し古典劇の普及に努めた。
- (14) Juan Goytiso (一九三二—二〇一七) スペイン・バルセロナ出身の作家。主な作品に『天国の悲しみ』、『戦いの後の光景』、『サラエヴォ・ノート』。ゴダールの監督作品『アウ・ミュージック』(二〇〇四)に本人役で出演。二〇一四年セルバンテス受賞。
- (15) Susan Sontag (一九三三—二〇〇四) アメリカのリベラル派知識人、批評家、作家。一九九三年、ボツニア内戦下、廃墟と化したサラエヴォの劇場でサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を上演した。
- (16) Octavio Paz (一九五〇) *El laberinto de la soledad*, México, Fondo de Cultura Económica.